

I 研究の概要

1 これまでの研究の概要

(1) 研究主題について

今年度で研究主題「発達と障害に応じた指導」のテーマを掲げて5年目となる。様々な障害をもち、個性豊かな児童・生徒に対してその実態に即した指導を行うためには多様な教育的アプローチが要求される。本校ではそれまでの学校全体や部単位での実践的研究の取り組み方式から、幾つかの研究課題を設け、部を越えた教師集団による研究プロジェクト方式をとることにした。この研究課題のすべては本校の教育目標である「全面的な発達をうながし、精一杯生きる力を育てることを目指す」から導き出されたものである。

研究4年目からはサブテーマ「子どもの気づきを大切にしたい」を設けた。これは子どもが主体的・自主的に活動する中で、子ども自身の内面世界の気づきを大切にしたいと考えたからである。

(2) 研究グループの成立

児童・生徒の実態に即した多様な教育的アプローチをはかり、かつ教師自身の意欲を喚起させるために、これまでの全体研究としてはどうしても取り上げにくい研究の分野、あるいは陽の目をみななかった分野や内容、また教師一人ひとりがもっている関心課題、分野などを取り上げる事になった。これらの研究課題は少人数のグループによるプロジェクト方式で研究されることになった。

下記に初年度の研究グループ名をあげるが、次年度以降研究を重ねる中でグループの名称や数などは、多少の変遷を経て今日に至っている。

①教科の学習と生活 ②授業中の「ものづくり」 ③からだづくり ④コミュニケーション ⑤パソコン教材の利用 ⑥性指導

(3) 研究内容及び経過

初年度は上記の6つの研究内容を選び、研究3年目にはそれまでの研究の成果と課題をまとめ、下記の4点を確認した上で、心あらたに研究に取り組み今日に至っている。

- ・ 従来のグループによる研究体制を継続する。
- ・ 全教師集団で、現在必要とする研究内容を出し合い、グループの研究テーマとする。さらにこの研究テーマを絞る事により、グループの研究に方向性をもたせ全教師が共通の課題意識をもって研究を行えるようにする。
- ・ 前年度の反省に立ち返り、グループ研究会と併せて、研究会を部に設け研究の成果や取り組みが理解され、広く活用され、実践の場に生かされるようにする。
- ・ グループの構成メンバーを5名程度とし、各部から出るよう配慮することにより研究が各部で生かされるようにする。

2 今年度の研究の概要

(1) 研究主題について

「発達と障害に応じた指導」は従来通りである。サブテーマは「子どもの気づきを大切に」であり、今年度で2年目となる。日々の実践から私達は、子どもの気づきに目を向ける大切さを感じ、このサブテーマをかかげて研究活動を行ってきた。

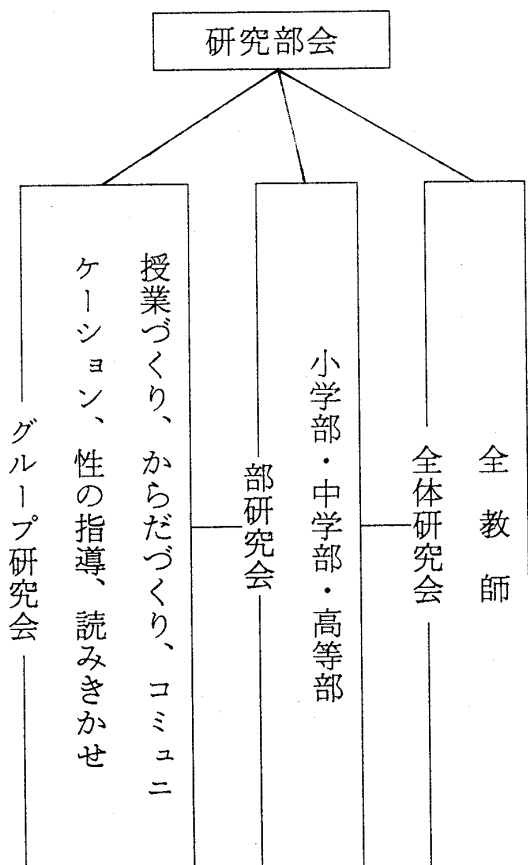
「気づき」とは、何かを発見すること、何かを感じる事である。子どもにはその子なりの素晴らしい感性がある。見たり、聞いたり、触ったり、体を動かしたりしながら時には知的に、時には感覚的にいろいろな事に気づきながら育っている。子どもの感じる心をより豊かにし、その子らしく精一杯生きる力を育てるために、このサブテーマを設定した。

(2) 研究の内容

「今、学校として必要な研究内容は何か？」及び「個人として研究してみたいもの」を子どもを念頭に置きながら話し合ってきた。その結果、各部の特色のある内容が多く出されたが、部を越えたグループによる研究を前提とするため、各部に共通する研究内容から選ぶ作業を経て次の内容に絞られた。

それは「授業づくり」「からだづくり」「コミュニケーション」「性の指導」「読みきかせ」であり、その内容をもとに5つの研究グループが生まれた。

(3) 研究の体制



研究の体制として研究部会、グループ研究会、部研究会、全体研究会がある。全体研究会で選び出された5つの研究内容がグループによって研究され、そのことが深まり広まるために部及び全体研究会がもたれる。

- ・研究部会は各研究グループの代表1名が出て計5名で構成され、研究全体の計画・立案を行う。
- ・グループ研究会では、5つの研究内容を各グループで分担し具体的な実践に基づいて研究を進める。
- ・部研究会は小学部・中学部・高等部の各部で行う。各部にはそれぞれグループのメンバーが所属する。各グループの研究内容や実践についての情報や意見の交換の場であり、研究と実践の共通理解の場でもある。
- ・全体研究会は教師全員によって構成され、研究テーマやグループの構成メンバーなど、研究の大枠を決定するほか各グループの中間報告会などを開催する場である。

(4) 研究グループの取り組み

5つの研究グループの取り組みについて簡潔に述べる。

① 授業づくりについて考える

私たちは、子どもが自ら手を伸ばし、触り、考え、試行錯誤する授業を目指している。単に知識を得たり、よりよい結果を求めることよりも、その経験を積み重ねる過程を大切にしている。昨年度にひきつづき、子どもの行動を分析することを通して、子どもが「わかる」そのわかり方を理解していくとともに、指導の手だてについても考えていきたい。

② からだづくりについて考える

発達段階に適した運動をすることは健康なからだをつくる上で重要である。しかし運動することに興味を示さない子、そのために肥満傾向などの問題を抱えている子どもも多くみられる。私たちはそのような子ども達に、楽しく手軽にできる活動を考え、それによって運動が楽しいものだということに気づかせ、運動好きな子どもが増えることを願いつつ実践を積み重ねてきた。

③ コミュニケーションについて考える

私たちはこれまでコミュニケーションは全ての学習の基礎であると考え、コミュニケーションを育てるためのさまざまな要因についてINREALの考え方をもとに探ってきた。学校における教師と子どもの良き相互関係を成り立たせる手だてを追求するとともに、今年度はそれによって子どもが何を「学習」したかについても目を向けてきた。

④ 性の指導について考える

子ども達の性にかかわる行動や性の自立について、どのように受けとめ、適切な指導をおこなうにはどうしたらよいのか、その実践を深め、さらにこれまでの研究の蓄積の上になって性の指導についてのカリキュラム（試案）づくりに取り組んだ。また、性の指導をおすすめるうえで大切に考えている家庭との話し合いの場をもつとともに新たな試みとして卒業生との会食にも取り組んだ。

⑤ 読みきかせについて考える

読みきかせを通して子どもとさまざまな情動を共有し、絵本の楽しさを味わわせたいと考える。そのためにも、見落としがちな一人ひとりの気づき（つぶやき・視線・表情など）を読みきかせ場面のVTRを見ながら、客観的に受け止め、絵本の選択、読みきかせの際の手だてについて研究を深めてきた。また、「絵本の日」についても、自由に読書をする時間をとってから、絵本の読みきかせをするなど、検討を加えてきた。

3 研究の考察と今後の課題（5年間のまとめ）

(1) 研究テーマ及びグループでの研究の意識や課題

・テーマ「発達と障害に応じた指導」及びサブテーマ「子どもの気づきを大切にして」を設定し、研究の方法としてプロジェクト方式を取り入れた事により、児童・生徒の実態

に即した様々の角度からのアプローチが可能となり実践された。子どもの気づきが成長につながる事、そして私達の側に子ども達の小さなしぐさや表情の変化に鋭敏な感覚が必要である事を学んだ。グループの研究テーマは、いずれも毎日の学習指導に直接かわりの深いものばかりなので、研究活動を日常的に進める事ができた。

- ・教師自身が興味や関心のある内容を研究する事ができたので、一人ひとりが研究の主人公としての意識が高まり、自主的に研究会をもち研究活動が日常的に行えた。
- ・グループの構成メンバーが縦割りのため、所属の部以外の児童・生徒の事例を検討できた事や教師間の情報交換ができた事は大きな成果であった。
- ・グループ員と父母との合同学習会やケース会がもたれるなど、学校と家庭との連携を取り合いながらの活動を行う事ができた。
- ・少人数のグループなので集まりやすく運営もスムーズにでき、研究は深まったが、各グループでの研究内容や成果を全校の教師集団へ広げるということでは不十分な点が見られた。

(2) 各研究グループのまとめ

① 授業づくりについて考える

私たちはこれまで、「子ども自身の感覚や感性を充分働かせる中で、知的活動への興味や意欲を育てる」ことを授業の柱として考えてきた。そして、子どもが主体的に取り組む授業はどうあればよいかについて摸索してきた。教師の一方的な働きかけだけでなく、子どもが自ら手を伸ばし、触り、考え、試行錯誤する授業を実践し、そこで子どもがどのように問題解決していくのかという過程において子どもの内面の小さな動きにまで気を配りながら、「わかる」喜びを子どもと共有することを目指してきたのである。

そこで私たちは、子どもが主体的に何かに取り組む姿の中で、子どもの思考過程をみるには、媒介となるものが必要であると考えた。具体的な「もの」、つまり教具を通して子どもがそれをどのように扱うのか丁寧に分析することで子どもの思考過程を探っていこうと考えたのである。そして、子どもの興味にあった、繰り返し学べるような教具を準備し、その教具自身に学習内容を盛り込んだ「もの」を提示することが、子どもが試行錯誤しながらあれこれ考える学習につながると考えた。

4年間、年度ごとある程度教科を絞りこんできたが、今年度は授業全般について探り、これまでの授業づくりを集約したい。

② からだづくりについて考える

我々が「子ども」をイメージする時、元気で遊びに夢中になっている姿を思い浮かべるのではないだろうか。この子どもの姿はまさに健康的な姿であるといえるであろう。しかし現実の子ども達は遊ぶ場所や時間的余裕がなく、何かに追い立てられているような毎日を過ごしているように見える。そのような子ども達が健康的に生活していくために我々は

何をどのように指導すればよいのだろうか。学校はそのための「場」や「時間」などを保証していかなければならないのではないかと、という基本的考えをベースに初めの2年間は「遊びを通したからだづくり」「リトミック及びトランポリンの試行」というテーマを設定し、日常の遊び、課外活動、あるいはリトミックやトランポリンという活動を通して、楽しくまた無意識のうちにできるからだづくりの具体的方法を摸索した。次の2年間は「運動能力に問題を持つ子の指導」「運動制限のある子の指導」というテーマで、運動の機能や能力に問題があってもなかなか運動できない子、あるいは心臓疾患などで運動制限のある子に対してどのような運動内容が適切なのかを考えてきた。

今年度は肥満あるいはその他の要因で自分から進んで運動しようとならない子が多いという現実をふまえて、どの子も運動の楽しさに気づき、運動好きになってほしいという願いをこめて「運動好きな子どもをめざして」というテーマで実践を進めてきた。

運動の機能や能力、また疾患などさまざまな問題を抱えている子ども達ではあるが、これからも健康なからだづくりを目指してこの実践を継続していきたいと考えている。

③ コミュニケーションについて考える。

子ども達と心をより合わせてかかわる中で、初めて楽しいコミュニケーションがとれ、その子の生きたことばが生まれるという考えのもとに、いかにして〈大人と子どもの豊かなコミュニケーション〉を作り上げていくかをINREALに学ぶことから研究の取り組みが始まった。

回数を重ねたVTR分析は、子ども達の言語環境の整備、コミュニケーション上の問題点の明確化、それ以上に子ども側だけでなく大人側を振りかえること等の大切さを教えてくれた。そのためには、大人の基本姿勢であるSOULを守り、子どもからの開始を十分に待ち、子どもが何を伝えたいのか伝達意図を読み取りながら会話をつなげ、子どもに合わせて反応することが大切であると学んだ。そして何より非言語行動などにこめられているサインを見のがさず敏感に対応できるように〈大人の感度〉を高める努力を日々の実践の中でしてきた。

朝の会や教科学習などの集団場面の指導においても個別場面と同様、一人ひとりのコミュニケーション課題を持ってのぞむようにし、《いつでも、どこでも、だれとでも》毎日の学校生活の中でコミュニケーションがとれるように心がけてきた。

さらに〈コミュニケーションは学習の基礎である〉と言われていたことから、豊かなコミュニケーションをつくと同時に、コミュニケーションが学習にどうつながっていくかについても目を向けてきた。

これまで学んだことを常に実践に活かし、たえず初心にもどり、今後も〈豊かなコミュニケーション〉を育てたいと願っている。

④ 性の指導について考える

性指導の必要性は誰もが認めつつも、その受け止め方考え方の違い、あるいは教師自身のとまどいなどがあり、とかく敬遠されがちなことから、これまで組織的な指導が困難であったといえる。その意味でこのグループができた事そして活動を進めてきた事に大きな意義を認めている。このグループを核として指導するための基盤が校内に作られ、教師間の意見の交換が活発になり、性指導が“市民権”を得て大きく動きだしたといえる。これは同時に子ども達が育つ上で大切な雰囲気、環境作りにもつながるものであった。

グループではまず子ども達の性に関する感情や行動を肯定的に受けとめることから出発し、その表現や行動には社会的な制約（マナー）があることなどを授業の中であるいは日常生活の中で指導してきた。この5年間の学習実践の積み重ねをもとに性指導に関わるカリキュラムの試案をまとめとして作成してみた。これまでの指導の中で周囲の反響の大きさに驚かされたのは、ファスナーつきトレーニングウェアへの切りかえによる排尿指導であった。あたりまえのこととして見すごされることでも性の視点から捉えなおすことの重要性を痛感させられた。こうした指導が学校全体に広く根づいていくことが課題といえる。

またこの指導が定着し、より効果あるものとするために家庭との連絡、協力を欠かすことができない。毎年続けている親との学習会では性指導を幅広く受けとめ、おしゃれなどについても話し合っている。また父母の思いや悩みなどから教師側が教えられることも多く、お互いに有意義なものとなっており、今後も大切にしたいと考えている。

⑤ 読みきかせについて考える

誰もが、いつでもできる読みきかせ。しかし、絵本を読みきかせたいという気持ちがあれば、子ども達と絵本との出会いは保障されないであろう。障害のあるなしにかかわらず人はみな美しいものを美しいと感じ、優しいものを優しいと感じる心を持っている。そのような子ども達の心を絵本との出会いのなかで豊かに育てたいと願う。

そのために、私たちは読み聞かせを通して子ども達とさまざまな情動を共にし、子ども達に絵本の楽しさを気づかせたいと実践、研究を進めてきた。

最初の1、2年は“とにかく読もう”と子どもを目の前にして、読むことに慣れるといった初歩的なことから始め、読みきかせる場や時間などを考慮していった。また、絵本の世界に入りこめない子ども達の心を揺さぶる手だてについても研究を進めた。

昨年度からは“子どもの気づき”というサブテーマで研究を深め、気づきは子どもの感動表現のひとつととらえることにした。そして、子どもの気づきを受け止め、絵本の選択、読みきかせの手だてについて考えてきた。本年度は昨年の研究をふまえて、気づきをより客観的に見つめようとVTRを見ながら、子ども達の気づきの分析を行う中で、よりよい実践へと研究を進めてきた。

今までの研究をふりかえり、子どもの気づきをより高め、それを気づく教師に、感性豊

かな教師に、と思う。また、全校の子ども達に呼びかけている週1回（給食後）の「絵本の日」は、3年間続いており、楽しみにしている子どもの姿が多くなってきているのも成果の一つであろう。

私たちは子ども達とたくさんの絵本を共有し、子ども達の心を揺さぶる手だてについて今後も考えていきたい。

（諸 江 修）